

近世国学者たちのいとなみ

—古典籍デジタルアーカイブズ化と国学者書入集成の試みから

乾 善 彦

On the some works by scholars
of the Japanese classics in late Edo period

—Making digital archives of the Japanese classics
and organizing of notes written into classic texts

INUI Yoshihiko

The Kansai University Library has many textbooks, those have many notes written into by scholars of the Japanese classics in late Edo period. This paper explains how much information can be gained by digitizing the text. For example, Yoshitaka Iwasaki's "Hyakunin Isshu Kaikansho" contains notes by Motoori Norinaga. Yoshitaka wrote Norinaga's notes in red ink, and then added his thoughts in light black ink. There are many other materials in which have Norinaga's notes, and by organizing them, we can learn how scholars of the Japanese classics studied the master's thinkings.

The Kansai University Library has "Manyoshu" texts, those have many notes written into Norinaga's thinking. One of texts is very similar to Norinaga's autographed text, that is Motoori-norinaga-kinenkan has. Another text has Nagase Masaki's notes. This is written with three colors ink, red blue and black. Red is Norinaga's notes, blue is another person's notes, and black ink is his own notes. In this way, a lot of information can be read by digitizing the text and organizing notes of meny texts written into by scholars of the Japanese classics in late Edo period.

キーワード：国学者の書入れ、師説の継承、岩崎美隆文庫

はじめに

岩崎美隆文庫をはじめとする関西大学蔵の古典籍のデジタル化をすすめる中で、近世国学者たちの「書入」が注目されることを、いくつか報告してきた。

①関西大学蔵契沖関係書あれこれ CSAC 第30回研究例会 2014.11.28 於関西大学

*報告書「関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー Vol.10」(2015.3)

②契沖と宣長—それぞれのその後 鈴屋学会宣長十講 2018.7.21 於本居会館

- ③万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集一付、万葉文化館蔵万葉集および万葉集関連書籍
— 奈良県立万葉文化館第 15 回万葉古代学公開シンポジウム 2018.9.22 於奈良県立万葉文化館

*報告書 万葉文化館『万葉古代学研究所年報 第 17 号』（2019.3）

- ④契沖と宣長—それぞれのその後 奈良女子大学古代学・聖地学研究センター第 15 回若手研究者支援プログラム 2019.8.25 於奈良女子大学

*報告書「第 15 回若手研究者支援プログラム 近世萬葉学—契沖を中心に—」（2020.3）

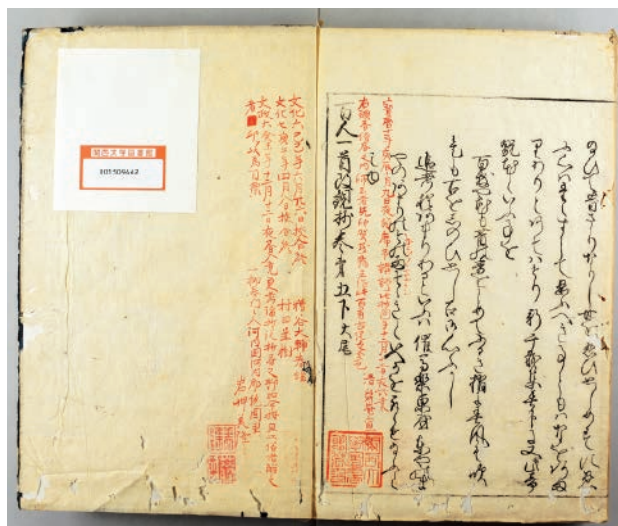
本稿は、そこでとりあげた近世国学者たちの「書入」資料を集成する試みが、デジタル化によってどのように進めることができるのか、その可能性について考えてみたい。なお、とりあげる資料の書誌等については、それぞれ報告書に掲載してあるが、行論の都合上、ここにも再掲し、詳述を加えながら考察を進めることにする。

1. 関西大学蔵岩崎文庫蔵百人一首改観抄（LI2 911.247 K1 2）

まず最初に岩崎美隆の、契沖『百人一首改観抄』に書き入れられた宣長注から検討をはじめ。本書は、全五巻六冊（巻五に上下巻がある）を合綴して一冊となっている。その最終丁と裏表紙見返に、それぞれ次のような、ふたつの奥書がある（図版 1）。

〔奥書〕

- 宝暦十年庚辰十月九日夜開席予講談此抄同年十二月十二日夜終業
- 清 舜庵宣長（宣長記念館本「清」ナシ）



図版 1 岩崎美隆文庫 百人一首改観抄（LI2 911.247 K1,2）奥書

- ・右頭書傍書之内師説者先師賀茂県主作此百首古説之義也

～以上、宣長奥書（最終丁ウ、[朱]）

文化六己巳年六月廿六日校合終 糟谷大輔春雄

文化七庚午年四月八日校合終 村田並樹

文政六癸未年十二月十二日夜書入竟更考諸抄説抄書之聊加今按旦以俗語解之者■印ヲ以為目標

一柳春門々人河内国河内郡花園里

岩岬美隆

～以上、美隆奥書（裏表紙見返、[朱]）

最終丁の3行は宣長奥書である。松阪市本居宣長記念館蔵『百人一首改観抄』は宣長の手摺本であるが、その奥書には、次のようにある。

- ・宝暦十年庚辰十月九日夜開席予講談此抄同年十二月十二日夜終業 舜庵宣長
- ・右頭書傍之内称師云者先師賀茂県主作此百首古説之義也
- ・天明四年甲辰閏正月廿日夜再開講同三月十日夜終業以十之夜為其期都六度而畢

岩崎文庫本には最終行、手摺本にある天明四年の講説終業の記事が欠けているが、宣長手摺本では、この行のみ刊記の左に離れてあるので、書写のいずれかの段階で落としたものかとも思われる。あるいは、つぎにとりあげる万葉集の場合のように、宣長手摺本のいくつかの段階の書写が伝播していることもあるので、美隆のよった本が、天明四年の講説以前に写されていた可能性も考えられないではないが、宣長手摺本にある貼紙による書入もほぼ存しているので、脱落と考えるほうが自然であろう。

見返奥書が美隆の奥書である。これによると文化六（1809）年に糟谷大輔春雄が校合し、さらに文化七（1810）に村田並樹が校合したものを、文政六（1823）年に美隆が、さらに他の諸注も参看して自説を書き入れたことが記されている。ここで、美隆のよった本が、すくなくとも二段階以上の書写を経ていることが知られる。

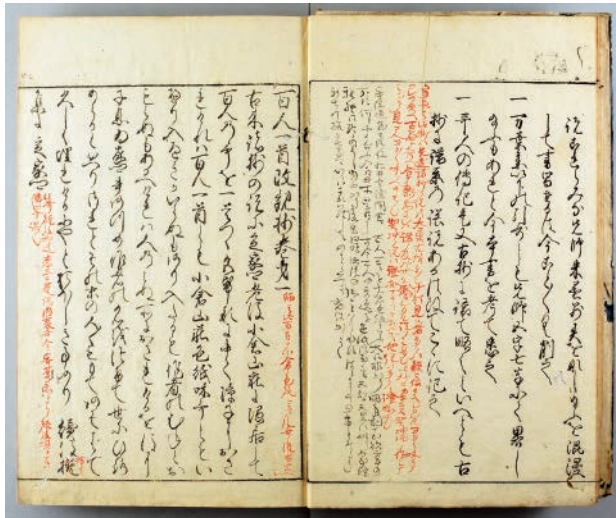
岩崎文庫本の冒頭部分は次のようになっている（図版2）。

〔冒頭書入〕

宣長云、此抄ハ先達ノ諸抄ノ説ト大ニ異ナル所多シ、サレバ見ル者多クハ疑テ信ゼズ、シカレドモヨクヨク味テコレヲ考ヘ古書ト考ヘ合テ熟思スレバ、諸抄ノ及バザル優レタル説ノミ多シ、此抄ニ限ラズ契沖師ノ作ミナ然リ、見ン人ヨクヨク味フベキモノ也、契沖ノ説ハ證拠ナキコトヲイハズ、他ノ説ハ多クハ證拠ナシ

～以上、宣長書入[朱]

- ・中院通茂公御説松井幸隆聞書 百人一首を小倉色紙といふ大に非なり。明月記嘉禎二年の所に何とやらんいふ入道の所望により古今百人の秀逸を色紙に書て天智天皇に始り家隆・雅経に終るのよし明白なり。後鳥羽院・順徳院の御ことはかゝれず、はゞかりての事とみたり。新古今撰定家卿心にかなはずしてのことゝ思ひ。惑説なり云々。



図版 2 同 冒頭書入

～以上、美隆書入れ[薄墨]

以下、もとにあった書入と自説とを、もとの書入は朱、美隆書入は薄墨で区別している。朱による書入を宣長手沢本とくらべてみると、宣長手沢本の書入は貼紙まで含めてほぼ書き写されているが、それ以外にも「彦麻呂云」「岡部氏説」の形式で宣長手沢本にない書入が存する。斎藤彦麻呂は宣長時代のものだし、「岡部氏」は真淵説。宣長は「師説」という形式で真淵説を書き入れているので、宣長以外の手によるものである。本書は自説のみを薄墨で書き入れているのだから、朱で書かれたこれらの説は、もとの本にあったものと思われる。美隆奥書によると、近い時代に少なくともふたりの手を経ているので、そのいずれかか、もしくはそれ以前の段階かで、宣長説に他の説が増補されていて、それらを反映したものが、本書の朱の書入ということなる。『本居宣長事典』によると、本書のほか、岩田隆蔵渡辺直麻呂書写本、静嘉堂文庫蔵本などが知られている。それらを含めて、書入を対照することで、宣長書入がもとなって、それをうけついで国学者たちよって、書入が増補されていく過程を考えることができるようになる。宣長説が書入の形で相応の広がりがあったこと、そして書写者による増補で膨らんでいったことが予想されるので、さらなる伝本の博搜とともに、書入の集成が望まれる。これによって、宣長書入を起点とする、国学者たちのネットワークや、かれらのいとなみが明らかになるのである。デジタル化は墨の色まで正確に把握できることで、朱と薄墨とによる該本の階層が知られる。そこにデジタル化の利点があると思われるのである。

2. 関西大学蔵寛永版万葉集（C2*911.221*1～20）

宣長説の書入継承ということで、つぎに関西大学蔵寛永版万葉集（全20冊）の書入をとり

あげる。これについては、④の報告書に詳述してあるので、今はそれを訂正・増補したかたちで、再掲することにする。

松阪市本居宣長記念館には、宣長手沢自筆書入本の寛永版『万葉集』が蔵されており、その奥書には、

右、萬葉集二十卷、以 景山屈先生家藏本校正之。至如冠註旁註亦皆據其本。已此本也先生所自校正、蓋以契沖先師代匠記為據、如其稱師云則今并似閑翁之說也。翁亦契沖之門人也。先生與似閑門人樋口老人宗武友善、是故 先生以其本校正點點冠註旁註之、則實契沖傳說之義、不待代匠記而明焉者也。故〈予〉深崇信之以餘力寫之、藏巾笥為秘珍矣。後之閱者勿忽諸爾

寶曆七年丁丑五月九日卒業于平安室坊寓居

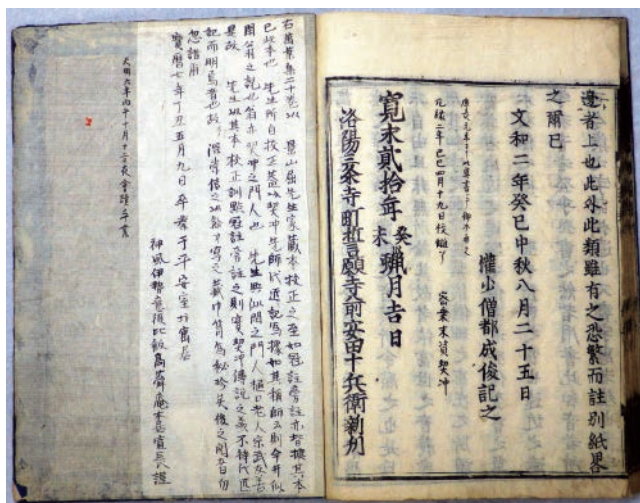
神風伊勢意須比飯高薺庵本居宣長謹

という貼紙がおされている（図版3）。この『万葉集』自筆書入本は、多くの貼紙があり、宣長が長い時間をかけて作り上げたもので、生涯に三度講説をおこなったテキストとして利用されたものと思われる。ただし、不思議なことにこの奥書は、卷二十裏表紙見返に貼紙の形で存するのである。その貼紙の後には、裏表紙に直接、

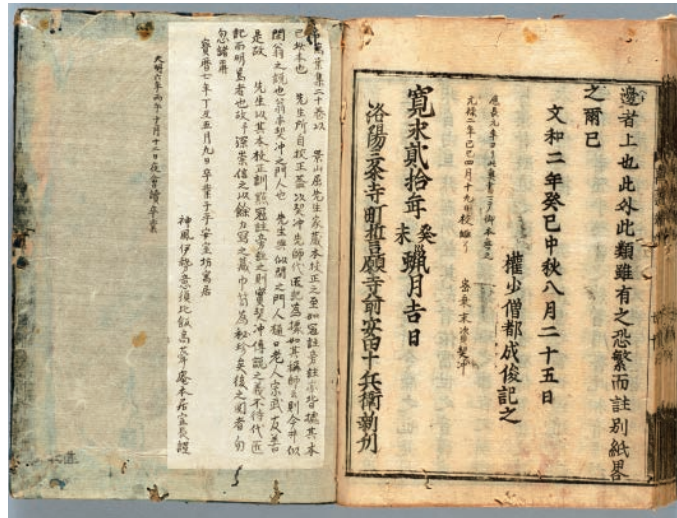
天明六年丙午十月十二日夜会読卒業

という講説卒業の記事が書かれている。これは二回目の講説の終業記事である。

ここでとりあげる、関西大学蔵寛永版万葉集（C2*911.221*1～20）の奥書は、宣長奥書の貼紙とその後の直書きの終業記事まで、そっくり同じ形態となっており、筆跡まで宣長奥書をまねたような特徴的な字形も含んでいる（図版4）。本書の卷一表紙見返には、つぎのように



図版3 本居宣長記念館蔵本居宣長手沢自筆本万葉集 奥書



図版 4 関西大学蔵寛永版万葉集 (C2*911.221*1 ~ 20)



図版 5 同

ある（図版 5）。

〔巻一表紙見返 書入〕

師ハ本居春庵宣長ノコト

岡ハ岡部氏加茂真淵ノコト

谷川氏ハ谷川上斉ノコト

万葉集書入二三冊ハ師ノヲシヘ書入アレトモ其度九州旅行是非ナシ依テ周令同門ノ兄稲掛大平カ本ヲ以助ケナランカト父政方六十歳ノ冬老眼悪筆ニテ全部書入畢ヌ帰国ノ後ヲコタルコトナカレ[朱]

また、巻一、巻二には奥書が次のようにあり、

〔巻一末裏表紙見返 奥書〕

奉進上／■■／一部俱二十卷／于時／天和壬戌年／林祥日／杵井氏常政九拝（墨）

〔巻二末裏表紙見返 奥書〕

上／八幡宮殿共二十用／于時／天和壬戌／林鐘祥日（墨）

この本は、もと杵井常政なる人物が天和二（1682）年に某八幡宮に進上した本であるが、某時、某所、某人の父政方が、九州へ旅立つ息子のために、同門の稲掛大平（寛政十一（1799）年、宣長の養子となる）の所持していた本をもって師説の書入を写したものであることがわかる。巻四以降、題簽巻次の右に万葉考による巻次が書き入れられており、国学者たちの所持本の例に漏れない。

巻一冒頭部の書入をみると、

〔巻一冒頭奥書末頭書〕

二条良基公ノサヨノネサメニ云顯昭ト云シ人日本紀ノ神代ヨリノ歌ノ心ヲカキアラハシ仙覺ト云モノ万葉ノムネヲエテ三百余首順ナドダニモヨミトカザル点ヲクハヘ侍リ

〔巻一 巻頭歌直前〕

栄花物語月宴巻云ムカシ高野ノ女帝ミヨ天平勝宝五年ニハ左大臣橘諸兄卿大夫等アツマリテ万葉集ヲエラバセタマヒ云々

万葉集橘諸兄撰聖武帝勅家持同撰云々 此説非也家持自分ノ撰也

の書入が宣長手沢本にもある。宣長手沢本では、栄花物語の引用と聖武勅撰説の否定は直筆書入、二条良基云々は貼紙で、巻一卷頭歌の直前におかれている。二条良基云々が巻一冒頭奥書の末に置かれるのはそこに仙覺の名前が見えるからかと思われるが、その他にも、宣長手沢本とは異なる点も多く、手沢本のある時期の段階で稲掛大平によって写されたものの姿をとどめるものである可能性がある。その点では、万葉文化館蔵『万葉集傍注』（凹邨文庫旧蔵、堀口光重、内山真龍書入本）と関西大学長澤文庫蔵宝永版万葉集の、次のような貼紙との関係が注意される。

【万葉文化館蔵『万葉集傍注』（凹邨文庫旧蔵、堀口光重、内山真龍書入本）】

表紙貼紙「凹邨文庫／第百三拾三号／全部貳拾冊」（巻一）

蔵書印「萬津迦計」（陰刻）、「光重之印」（陽刻）

〔内山真龍書付貼紙（巻二十 成俊奥書の丁）〕

万葉集之今ノ本 傳り候ハ延元年中／吉野ノ御子宗良親王信濃ノ姨捨山／にかくれおはしまし、時権少僧都成俊ニ／あたへ給ふ万葉集也此事ハ万葉集奥書／文和年中僧都か文と宗

良親王／の歌集と引合候へハよく相知レ申候此／親王ハ遠江国引佐野ニ忍ハセ給ひて／遠江ニ陵有仙覚之訓之外ハ親王／と僧都之訓と存られ候／内山真龍
〔堀口重光書付貼紙（宣長手摺本奥書貼紙の後）〕
右萬葉集者師〈本居宣長〉書入校正之本也但予以稲掛大平之本／寛政九年十月四日書入写畢
同十一年己未五月廿五日／以殿村安守之本再書入校合畢／神風伊勢飯野御民 堀口光重

【関西大学蔵宝永版万葉集（L23*900*7492／7511 長澤文庫）】

〔奥書〕

- （卷五末） 癸卯歲暮十有四日久山下在聴好堂校正畢／度正均〔墨〕
（卷八末） 天明三癸卯年十二月廿八日在久山下校畢／度正均〔墨〕
（卷九末） 癸卯歲抄久山下在聴好堂校畢〔墨〕／十二月二日畢／度正均〔朱〕
（卷十三末） 度会正均／天明三癸卯年暮臘月十有五日夜於灯火校畢／此夜春来るといふ歌を各々よむ〔朱〕

万葉文化館蔵『万葉集傍注』の凹邨文庫の蔵書票、堀口光重、内山真龍の書入については、拙稿「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集一付、万葉文化館蔵万葉集および万葉集関連書籍一」『万葉古代学研究所年報 第17号』（2019.3）にあらましふれるところがある。このうち堀口重光書付貼紙に、やはり稲掛大平のもとにあった宣長書入本の書入れを写した旨の記述があり、宣長書入本の広がりがかがわれる。

関西大学長澤文庫本には、関西大学蔵宣長書入本と同様、題簽の卷数の傍に万葉考の卷次を朱書し、また、巻頭歌の直前の宣長書入のうち、「二条良基云々」の右肩に「附札」とあり、もとの本が宣長手摺本の形態と同じであったことがうかがわれる。奥書の天明三年は宣長手摺本末の「天明六年…終業」よりも前にあたり、宣長手摺本自体が年数を経て成立し、さまざまな段階で写されていたことをうかがわせる。（以上④報告書より）

当該の寛永版本と宣長手摺本とをくらべると、若干の出入りがあり、手摺本の書入がそのまま写されているわけではない。関西大学には、ほかにも数本、宣長書入を受け継いでいるものがあり、宣長書入は、相当広い範囲で、近世国学者たちの間に受け継がれていたものと思われる。先の『百人一首改観抄』同様、そこに、宣長書入を起点とした書入集成の意義がある。それによって、近世国学者たちがどのようなルートで、宣長書入を受け入れていったのかが明らかになる。近世国学者たちのネットワークの解明につながると思量するものである。

3. 長瀬真幸による宣長書入本の書写

つぎに、デジタル化によって鮮明なカラー画像が提供されることで、宣長書入の実態が把握

されることが期待される例として、長瀬真幸による宣長書入本をとりあげる。長瀬真幸（1765～1835）は肥後出身の国学者、宣長門。万葉集の秀歌撰である『万葉集佳調』の著作で知られ、真淵門の橘千蔭、村田春海らと親交もあり、『訂正古訓古事記』の編纂や真淵の『万葉考』の刊行にも関わった人物である。

関西大学広瀬文庫蔵『万葉集傍注』は、題簽は版本の題簽ながら、本文はすべて版本を手写したもので、長瀬真幸による書入本を写したものである。巻一表紙見返の書入と巻一奥書とによって、真幸の書入の大概が知られる。

【関西大学蔵万葉集傍注（L25**1-36*1～20：廣瀬文庫）】

〔表紙見返〕（図版6）

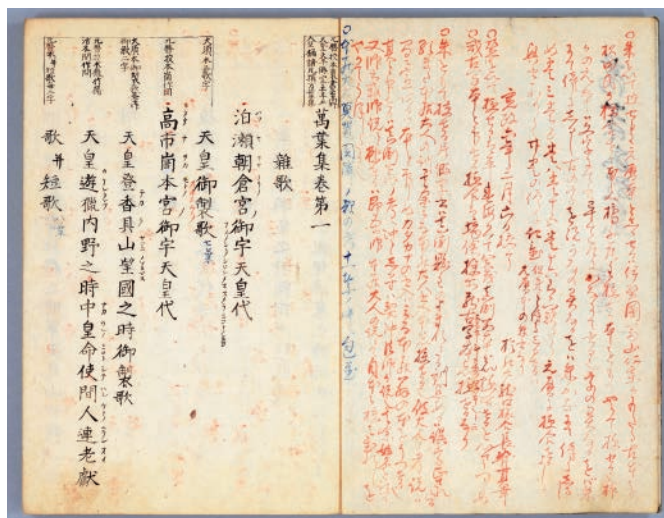
○朱を以て校せるに元暦本としるせるは伊勢国富山何某がもたる古本を杵田氏が校合せる本を以橘千蔭主校せる本をもてやがて校せる也。抑かの元本は文字にて書畢て左にかなにて書る也字の異なるをば朱にて傍しるし古の字を添、かなの異なるをば朱かなにて傍にしるしぬ。卷三卷五卷八卷十五卷十六已上闕たり。元暦に校合せるよしの奥書ありて廿卷の終に記置〈但朱と傍にしるせるは／元暦本の朱書なり〉

寛政六年三月六日校了 於江戸蔵口旅合 長背真幸

○藍を以て校せるは平春海かつて賀茂真淵別本を以校合せるを以てうつしぬ。

○或古写本と印せる校合は塙検校所蔵古写本（三百年斗己前写本也ト云）を以校せるなり。

○朱をもて校せる片仮字書は真淵県主のよまれたる訓点、あるは誤字正されたる歌、また本居大人の訓、其余みな本居大人書入本を以校せる也。彼大人ノ考説ハ間ニ宣あるは本と印しぬ。カタカナの書入はみな本居翁の本をうつせる也。真と印せるは真淵翁ノ考へ、沖と



図版6 L25**1 - 36*1～20：廣瀬文庫 巻一見返

しるすは契沖法師が説也。其余姓名を記す。又師云、或師説と捺せるは即吾師本居大人の
説にて自本に校し置れしをやがてうつしたる也。〔以上朱〕

○本居大人莫囂円隣ノ歌の考十一葉ノ中ニ包置。〔藍〕

〔卷一 卷頭歌の直前〕（図版 7）

本居翁書入

栄花物語月宴卷云昔シ高野ノ女帝ノミヨ天平勝宝五年ニハ左大臣橘諸兄卿大夫等アツマリ
テ万葉集ヲエラバセタマヒ云々

二条良基公小夜寝覚ニ云顕昭ト云人日本紀ノ神代ヨリノ歌ノ心ヲカキアラハシ仙覚ト云シ
モノ万葉ノムネヲエテ三百余首順ナドダニモヨミトカザル歌ニ点ヲ加ヘ侍リキ

万葉集橘諸兄撰聖武帝勅家持同撰云々 此説非也家持自分ノ撰也〔以上朱〕

真幸考〔藍〕

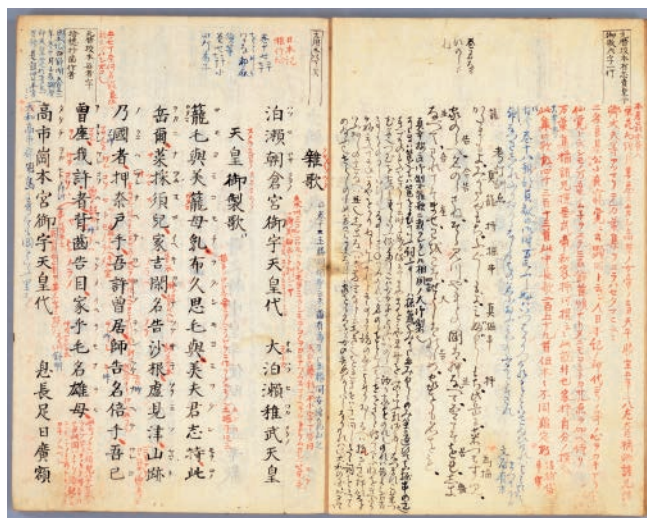
此集の歌数四千三百十六首此中長歌二百五十九首但本々不同難定数 〈清輔袋草紙〉〔朱〕

同

古今卷十八雑部貞観の御時万えふじふはいつはかりつくれるととはせ給ひければよみてた
てまつりける／神なつきしぐれふりおけるならのはの名におふみやのふることぞこれ 文
屋有末〔以上藍〕

〔卷一 歌末、卷一奥書の前〕

寛政六年九月十七日以本居大人校本写校之了



図版 7 同 卷一目錄末

寛政六年三月六日於江門以橘千蔭校本元暦古本校合了〔以上朱〕

寛政五年十月六日於江門平春海校正本校之畢 長瀬真幸〔藍〕

〔卷三 末尾〕 寛政六年十月七日以本居大人校本之写校之畢 長瀬真幸

〔卷三 裏表紙見返〕 吉見有友書藏

〔卷二十末尾 奥書〕 天保十三年壬寅年暮秋二日写終／吉見有友（花押）

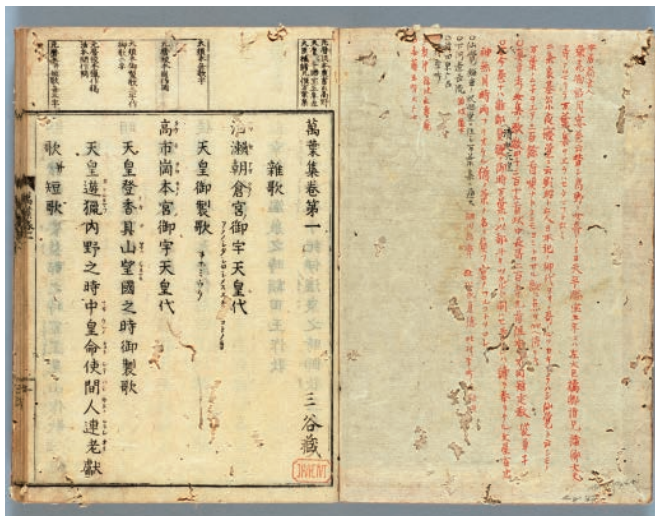
広瀬文庫本は、天保十三（1842）年に吉見有友が長瀬真幸の校合本の系統をひくもの。真幸の本は、寛政五年から六年（1794～1795）にかけて、平春海校正本、元暦古本を校合した橘千蔭校本、そして宣長書入本をそれぞれ校合したものであった。千蔭が校合した元暦本は、伊勢松坂の中川家が所蔵していたのを、当時は同じく松坂射和の富山家が所蔵していたもの。

この本では、朱と藍とで元の書入を区別しており、これを読み解くことで、どの注がどの本からの書入であるかがわかるようになっている。注意されるのは、種々の本を引用するが、もっとも中心に宣長書入をおいていることである。宣長説、千蔭説は朱で、春海の校合と自説を藍で書き入れ、両者を区別している。このように色を変えて薄墨あるいは藍で新しい説あるいは自説を加えることは、先に見た岩崎文庫の『百人一首改観抄』と共通するものであり、これが国学者たちの、諸説を校合するときのひとつの方法であったといえる。

関西大学にはもう一本、真幸書入本がある。

【関西大学蔵万葉集傍注（911.224*Y2*1-1～20）】

〔表紙見返〕（図版8）



図版8 関西大学蔵万葉集傍注（911.224*Y2*1-1～20）巻一 見返

本居翁書入

栄花物語月宴卷云昔シ高野ノ女帝ノミヨ天平勝宝五年ニハ左大臣橘諸兄卿大夫等アツマリ
テ万葉集ヲエラバセタマフト云々

二条良基公小夜寝覚ニ云顯昭ト云人日本紀ノ神代ヨリノ歌ノ心ヲカキアラハシ仙覚ト云シ
モノ万葉ノムネヲエテ三百余首順ナドダニモヨミトカザル歌ニ点ヲ加ヘ侍リキ

○真幸考此集ノ歌数四千三百十六首此中長歌二百五十九首但本□不同難定数袋草子

○古今卷十八雜部貞観ノ御時（清和天皇[藍]）万葉ハ以都斗リツクレト問ハセ玉ヒケレバ
読テ奉リケル文屋有末神無月時雨フリオケル櫓ノ葉ノ名ニ負フ宮ノフルコトゾコレ[以上朱]

○仙覚 鎌倉ノ釈迦堂ニ住シ万葉集ニ通ズ[藍] 細川幽齋 松永貞徳 北村季吟ニモ録須
[朱]

○下河辺長流[藍] 難波処士[朱]

○荷田東麻呂

○北村季吟[以上藍]

○契沖 難波延寿庵

○安藤為明 水戸士[以上朱]

〔卷二 尾題下〕 明治十年／十月三日夜書入済 有信

〔卷二 末尾〕 久留米庄 嶋街／三谷蔵 [印]

〔卷三 尾題前〕

文政九年十二月四日以略解加入畢〈大滋〉 同十年正月八日以櫪之落葉加入畢／明治三年
十月 日以大滋摸本写之畢／有信

〔卷四 裏表紙見返〕 明治十年十一月廿日夜書入畢 有信

こちらは版本の『万葉集傍注』であるが、これも長瀬真幸の書入本を書写したものであり、『筑後地理小誌』などを著した三谷有信が、明治十年に写したものである。明治にいたるまで、国学者たちの営みが広く全国各地で行われていたことをものがたる。やはり、朱と藍とで書入が区別されており、これらの整理には、カラーの画像が欠かせない。

関西大学には、もう一本、寛永版本に書入のある本がある。山崎美隆文庫蔵の万葉集（LI2*911.221**3-1～6、二巻ずつ合冊、計6冊）は、卷九以降の残欠本であるが、卷九・十の第一冊には、朱の書入があり、やはり宣長書入を含む。しかし、全体的には朱書はすくなく、ほとんどが墨による美隆の考でしめられる。美隆の調査実態が知られる資料ではあるが、卷九以降の存ということもあり、全体像は今後の調査・整理にゆだねられる。

4. まとめと今後の展望

以上、宣長書入を起点として、近世国学者たちが、師説の書入を書写しながら、そこに自説や他の説を書き入れていくことによって、自身のテキストを成長させていく、そのような過程を解明する手掛かりとして、書入本のデジタル化とデータベース化が有効であることを見てきた。自説を古典籍の書入の形で伝えることは、宣長の方法もそうで、さかのぼって契沖の説もそうであった（岩波書店版『契沖全集』には、そのような書入を集めた巻あり、それによって、成書となっていない契沖の古典解釈を知ることができるのだが、『宣長全集』には残念ながらそれがない）。書入によって師説を学び、それを伝えることで師説を継承してゆく、それが国学者たちの通常のいとなみであるならば、われわれはそれを集成することで、国学者たちのいとなみの総体を明らかにすることができる。そのために、国学者たちの書入本のデジタルアーカイブズ化は、きわめて威力を発揮する。書入の集成の道筋が、これによって得られたといつてよからう。

万葉集の宣長書入については、城崎陽子「本居宣長記念館蔵「本居宣長手摺本『万葉集』」における注釈と環境」（獨協大学国際教養学部 マテシス・ウニウエルサリス 19-1（2017.9））によって、その先鞭が設けられているが、今後、これをいかすためにも、宣長書入のデータベース化がいそがれる。個別の調査事例は多く存する。それはまさに、ひとりの国学者のいとなみとして記述されてきた。しかしながら、同じ書入がどこにどれくらい共通してあるかという目で見てこれなかったきらいがある。それには、共通する書入の集成が必要だったからである。

もちろん、従来、見過ごされてきた感がある書入資料の発掘と整備も課題である。今回の関西大学図書館一館の調査だけでも、如上のような共通の書入がみとめられた。③の報告にも数点指摘される。今後の課題は膨大であることが予想されることを最後にふれて、中間報告的ではあるが、国学者書入集成の構想をかかげた次第である。

〔付記〕

図版の掲載につきまして、松阪市本居宣長記念館、関西大学図書館のご許可をいただきました。